

---

# リカにあげる花

両角忘夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リカにあげる花

### 【Nコード】

N1527A

### 【作者名】

両角忘夜

### 【あらすじ】

精神障害（統合失調症）者の知人、リカの死を語る僕と彼女。障害者たちの風景。

帰宅を目指す通勤客でごった返す新宿で乗り換え、荻窪に向かうところだった。渋谷駅で、人身事故発生のアナウンス。苛立つ顔や、ほろ酔い気分の人の流れを避けながら、階段を上った。

ホームで電車を待っていると、携帯電話が鳴る。帰りを待つヨシエからだった。

「リカが死んだ」。ヨシエが言った。

保健所の三階にある、精神障害者同士が集うスペースで、毎日彼女は僕の帰りを待っている。この日、以前通っていた作業所の知り合いと再会し、リカの訃報を聞いた。一ヶ月前の話らしい。

荻窪でヨシエと合流し、ファミレスに入って話をした。

「職員からは、薬の飲み過ぎによる中毒死だって発表があったらしいけど、自殺かもしれないって。統合失調の子は、一割くらい自殺するって聞いたことあるし」

死後、三日経ってから発見されたという。

「でもあの子は、グループホームに入所してたよね」

「グループホームって言っても、リカが入ってたのは普通のアパートみたいな所だよ。泊まりがけの職員はいるけど」

なのに、三日経たなければ発見されなかったリカ。

「職員も、一応面倒見てたらしいよ。薬飲んだかとか、作業所出てきなさいとか。リカは嫌がってたけど」

「他の人とも距離あったんでしょ」

「人気はあったけど、友達として付き合うのは大変だから。でも、あたしが見た頃は元気だったし、死ぬなんて思わなかったよ」

元気というより、周りが引いてしまうくらいハイテンション。僕も、そんなリカを面白い子とは思ったが、いい印象は持てなかった。

伝え聞く話も、悪い話が多い。些細な額だが、おごらせたり盗んだりする。悪口を言って喧嘩になり、自殺すると叫んで、ほんとに窓

から飛び下りて怪我をした。夜中に大音量で音楽をかけ、怒られた。生活保護で支給されたお金は、ゴスロリやキューティーふうの派手な服やCDに使い、ろくな食事をしていなかった。

「カップ麺とジュースばかりだったよ」

「そんな食事で、強い薬使ってたら確かに死ぬよ。自殺じゃなくて、自暴自棄で、自殺みたいなものだ」

「17種類、薬飲んでたって。ベゲタミンAとか」

「お前も気をつけろよ」。僕は言った。

ヨシエも以前、症状が重かったときは薬をバカ飲みしていたし、食事も、僕と付き合い始めの頃は、コンビニで買う麺類とコーラが主だったから改めさせた。

「病気だから、生活管理できないんだよ」

グループホームに入所する以前のリカは、母親と祖父の三人で暮らしていたという。

リカにはお母さんが必要。一時期、彼女と付き合い合っていた男が言っていたらしい。

「あたしも、リカには母親の世話が必要だったと思う。障害者も自立とか言うけど、簡単じゃない」

「でも、お母さんも疲れちゃったのかもしれないね」

「だけどお母さんの言うことは聞くし、仲良しだったみたいだよ」。  
ヨシエは言った。

以前、このファミレスにも、親子で食事に来ている姿を見たという。  
「でも、お母さんにも障害あるから、中学まで施設で暮らしてたって」

「一緒に暮らせればよかったのにな」

僕はそれから、彼女の部屋に残った、大量の服やCDを想った。

「偏見かもしれないけど、あんなふうに服を買い集める子って、幸せじゃない気がする」

「寂しいんだよ」

自分たちに余裕があれば、もう少しリカと遊んであげてもよかった。

ワガママ言ったら、辛抱強く、「そういうことしてたら嫌われちゃうよ」と言っておけばよかった。

ファミレスを出ると、湿気を含んだ生温い風がふいていた。こんな夜、ヨシエと二人で、西友の横を歩いていたら、ピンクのシャツを着たりカにばったり会ったことがある。満面の笑顔とハイテンションで喋りかけられたが、長引かせたくなくて、挨拶を適当にして別れた。

またどこかで、ばったり会いそうな気がする。

「今頃、天国で、誰かの悪口でも言ってるのかな」

「天国かは微妙だね」。寂しそうにヨシエは笑った。

「あたしはリカを忘れてたのに、あの子はあたしのこと、親友だっ  
て言ってたらしい」

「そうなんだ」

「だからあたし、墓参りに行くよ」

「そうだね」

派手で、寂しかった女の子のために、綺麗な花を持っていこう。

さようなら。リカ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1527a/>

---

リカにあげる花

2010年10月17日01時58分発行